

宇宙のパイオニア

月・火星・金星への旅

第<22>回

1949年 ジョージ・アダムスキー著

竹島正訳

この本を人類の善意に捧げる（著者）

第8章 金星（1）

夜が近づく頃、我々は離陸に備えて宇宙船の最終チェックが終わったばかりの飛行場に到着した。あらゆる点からしてこれは新型の宇宙船であり、月面からここに我々を乗せてきたものよりはるかに大きい。我々の感嘆に応じてホストは今回がその処女飛行であることを告げた。内部に入ると、それは科学研究所をも備えた豪華な宮殿というべきものであった。

この宇宙船は火星の最新の技術に沿って造られたものである。これもまた、三重の船体構造をしており、槍の穂先のような機首を持ち、自動的に、乗員にとって最も快適な圧力と温度に船内の空気を保つ空調システムが備えられている。

我々のホストの他に2名の科学者がこの金星への旅行に同乗している。この宇宙船の乗員数はこの2名の科学者を含め60人である。

この旅行のことを考えると我々は胸が高鳴った。これによって我々は地球人がこれまでその周囲の大気を貫くことができなかつたために、恐らく人が住んでいないだろうと主張してきた惑星に向けて、なおも宇宙を進んで行こうとしているのである。

多くの高賓が飛行場において旅行の成功を願ってくれた。

離陸は滑らかで音もしなかつたため、我々は地表を離れようとしているとは気が付かない程であった。2000フィートの高度で操縦士達は、しばらくの間、我々が都市や農村など火星についてのより多くの事柄を見られるように水平飛行に移った。

火星の表面の様子は地球と非常に良く似ている。数多くの広大な山々がありその間には肥沃な谷が伸びている。また、地球の平原に相当する平坦な地域や多くに河川も見えた。ある程度の大きさの都市や、多くの村落の上空を通過した。今、遠くに極冠が見えてきた。それは巨大な氷河のように見えるが、我々はそこには近づくことはない。ここは我々が金星へのビームに乗る場所である

からだ。

彼等がこれを行う様子は奇妙である。宇宙船の装置パネルには小さなスクリーンがあり、目指す惑星の光が焦点を合わせられている。この装置の詳細については我々には分からないが、原理は天文学者が望遠鏡のミラーの焦点に像を得るのに似ている。スクリーンに惑星の焦点が完全に合わせられると、操縦士の一人がボタンを押す。そして宇宙船は確実に望む方向にむけて光の航路に乗るのである。

我々のホストは、一端これが確立すれば実際その光によって宇宙船が引き寄せられるため、いかなる外部の妨害も宇宙船のコースを変化させることはないと言明する。

この説明は我々には反対のように感じられた。我々はこれまで惑星は光を反射するのであり、自ら輝くのではないと教えられてきたことからすれば、その光は惑星から遠ざかるべきものである。しかし、我々は惑星の光によって引き込まれているという。

我々の困惑に気付いて、彼はこう続けた。「その光は惑星から宇宙に向けて離れ去るという物ではなく、宇宙からその惑星に向かってやってくるものです。おわかりのように太陽は太陽系の中心にあり、全ての惑星はそれぞれの軌道で太陽の回りを回転しています。皆さんが光と呼んでるものは太陽からの放射ですし、実際、太陽からその惑星へ向かって進むものです。しかし、惑星からの反射光は短い寿命しかありません。宇宙を遙か彼方まで突き進むことはありません。惑星の大気圏内で実際、消失しまうのです」

「それでは、何故その望遠鏡は惑星からの直接の光を捕らえるようになるのでしょうか」とジョンストン博士が尋ねた。

「それは幻影を捕らえているに過ぎません」と我々の友人が答えた。「望遠鏡というものは皆、イメージを投影するものです。惑星は光源を持たないため、光を発することはできませんが、光と呼ぶ太陽の放射によって照らし出されます。この理由のために惑星や星に用いる同じ装置を太陽について用いることはできません。投影されたイメージは言わば冷たい、あるいは陰の光ですが、直接の放射は熱い、陽の光です。しかし、全ての光は電氣的な力、エネルギーなのです」

「もう宇宙船が実際、太陽から惑星に向かって絶えず発している光や放射によって引っ張られ、あるいは押し出される様子がおわかりでしょう。こうして地球人がいう光の速度で飛行するのです。でも私達はそれを太陽の放射光のスピードと表現しますが……」

火星から1000マイルの所で、我々は様々な大きさの流星雨に突入した。これに対し我々は何ら恐れもなく、心ゆくまで楽しむことができた。何故ならこの宇宙船は宇宙空間に500マイルにも広がる反射力を備えており、危険な衝突から我々を守ることを知っているからである。

しかし、500マイルは相当な距離であり、ボブは何故宇宙船からそのようなパワーを伸ばすことが必要なのかを知りたかった。

宇宙船の科学者の一人がボブの質問に答えた。「流星は非常な高速で進むた

め、宇宙船から遠くに反らせておかないと、私達が気付く前に迫って来てしまうのです。それにも係わらず時にはこの防御壁の外側を通過して来てしまう大きな流星もあります。この流星雨を通過する間我々はスクリーンを注視して、こちらに向かい続けている流星を見つけた場合にも、船体の中間壁にある巨大な防御パワーを起動させることができるようにしています。その影響範囲は200マイルまでしか広がりませんが、強力なためこれまでにいかなる流星もそれを通過したことはありません。私達が最初に惑星間飛行を試みた時、宇宙船は単一の隔壁を持つだけでしたが、強い流星の衝突により、その多くを失いました。その当時でさえ、他の惑星の宇宙船は3層の船体によって構成され、反発の法則を用いて航行の安全を図っていました。この方法を学んだ我々はそれにしたがって私達の宇宙船を建造した結果、金星や土星、木星へ安全な旅をするようになりました。この他にも地球とその月、月と火星の間にも大規模な流星群がありますが、火星と他の惑星の間のもは他に比べ遥かに密度が高く、大きな流星群です」

「流星群について言えば、私達の記録の館には、或る流星の記載があり、それによればそれは宇宙空間を落下するにつれて、中立域に近い磁場に捕らえられ、そこで重力の境界線の外側で円を描いて回転するようになったとされています。耐えざる運動のためそれは非常に熱くなって太陽となり、今もなお我々の太陽系の太陽として役割を果たしています。記録によれば、これは3億年前の出来事であるとのこと。この間に、今日、太陽と呼ばれるこの特別な流星の周囲に、人類が生まれたばかりの太陽系が造り出されたのです」

「このことが知られるようになってからは、他の惑星の科学者たちは、他の太陽もこのように現れるのかと興味を持つようになりました」

「地球の皆さんが持っている形式の望遠鏡では、このシステムを見ることはできませんが、私達の望遠鏡ではそれを見ることができます。その距離は火星から10³⁰光年に及びます」

我々は今や、金星への中間点に達し、非常にたくさんの流星に遭遇しているため、それらは我々の進路を照らすかのようである。それらは様々な色をしており、いろいろな種類の花火にとってもよく似ている。あるものは他の物の輝きによって、冷えているようにも見える。我々が注視するこのスクリーン上に、様々な大きさの流星を見ることができ、あるものは20ないし50トン以下に思われる。これら大きな流星は、宇宙船の進路から排除するのに莫大な反発力を必要とするに違いない。

我々の心の中の疑問に気付いて、その科学者はそれは我々がダウンフォースと呼ぶようなものによって動いているため、多くの動力を要しないと説明した。一度、流星が反発の壁に当たると、それは前進を続けることを止めて、いわば落ち始めるのである。しかし、我々が50トンの流星を目撃した時、彼等はそれを第二の反発域で飛ばしたが、たぶん用心のためだろう。それは本当に大きな火球に見えた。

彼は我々にこう言う。「流星の中には火星に1500万トンもの重量で落ちたことがあります。全ての流星は他の鉱物同様に多くの部分が鉄から成り立っ

ており、私達火星人は非常に強力な電磁石を持っていますので、それらを地中から直接引き上げて、その組成を調べるため切り出すことができます。これら流星の中には内部に非常に硬い結晶を持っているために、切断できないこともあります。ある時は特別大きな流星が私達の惑星に衝突しましたが、その巨大な大きさと衝突力のために、20年間は地下から取り出そうとはしませんでした。その間の年月にもかかわらず、私達がそれを切り出した時、その中心部はまだ熱かったのです。切断する際私達が幸運だったのは、内部の結晶の塊をはずしたことです。さもなければ半分も切り開くことはできなかったでしょう」我々は900万マイルの幅を持つ火星と金星の境目を通過していたが、この宇宙船に乗っていると非常に滑らかで、知らされるまではそのことに気付かなかった。

「さあ、私達は金星から2000万マイル内に来ていますし、この惑星を取り囲む厚い大気圏に入ろうとする所です。これはほとんどがチリの粒子から成るある種の雲の堤の様なもの。現在の私達のスピードで航行するには、その粒子も実際、宇宙船を摩耗させる為、これに対しても私達は例の反発力を用いなければなりません」と科学者が説明する。「この雲は金星の衛星によって作り出されますが、その衛星は地球の月に似たものではありません。強烈な砂嵐がその衛星に絶えず吹き付けていますので、幅50万マイルに渡って惑星の周囲にチリの帯を作り出しているのです。それはある部分を取り巻くという皆さんの言う言葉上の意味での帯ではありません。その厚みのゆえに言ったままで、それは惑星全体を被っていて太陽からの衝撃による強烈な熱から保護しています。金星は太陽に近いからです。

我々はようやく雲から抜け出て、完全に金星をこの目で見る事ができる。ここから見るその大気はとても透き通っているが、相当の湿気がありそうだ。測定装置はかなりの量の水分を示している。ホコリの雲の全域はそれ以上である。我々にはそれがホコリというよりは霧のように見えた。我々は惑星から離れた霧や水分の存在が随分と離れたところにあるように思えたが、科学者が言うには、そうではなく他の太陽系の惑星もそのように離れたところに同様の層を持っているという。しかし、この太陽系の中ではこのような防御シールドを持っているのは金星と水星のみであり、それらもそれぞれの密度は異なっているとのことである。

我々は金星に近づきつつあり、測定装置は大量の水分の存在を示し続けている。その田園地帯はみずみずしい緑で被われ、この惑星における大量の水の存在を示している。一方、上空1000フィートを巡回しながら見る都市は真実というよりは御伽の国に近い。火星人のホストは我々にここは金星の首都であり、この惑星で最大の都市であると告げたが、我々には雲上に建つ城の様に見えた。操縦士達はこの美しさを我々に満喫させるため巡回を続けている。ちょうど着陸準備に取りかかった時、雨が降り出した。いつもの豪雨であり、我々は地上から少しの間着陸を延ばすよう信号を受けた。この様な雨は科学者によれば定期的な現象であるようで、一年の内の季節によっては一日に3回程この様な豪雨になるものの、それも非常に短い間だけであるという。

もう雨がやみ、我々は着陸するよう信号を受けた。飛行場には大型の宇宙船がたくさん有り、2機を除いてその全てが金星のものであった。その内の1機は木星の記章があり、他の1機は土星の絵が描かれていた。

過去何世紀もの間で、初めて金星の土を踏み地球人の我々を迎えるため、多くの人々が空港に集まっている。宇宙船のドアが開くと、彼等の歓声が上がった。我々のホストが我々を先導して外に向かった。宇宙船のドアの所で、彼は金星の科学者と会い、両者は握手をして挨拶すると我々を紹介した。

ジョンストーン博士が地球の科学者と紹介され、大きな花束が手渡された。金星の科学者からの贈り物である。花の香りは心を沸き立たせるものがあり、花卉は真珠色の織物のように繊細である。

外での最初の呼吸は空気が希薄なため何処となく違和感があったが、我々はすぐに馴らすことができたので、今は楽に呼吸できる。

我々の関心はその王国の花と同様に、我々を取り巻くその容貌があまりに美しく繊細な人々に向かった。彼等は我々を直ちに見通す様で、我々の心を実際に読むことができるようである。我々はこれまで彼等がテレパシーの分野の達人であると聞かされてきたので、我々は自分の想念に注意しなければならなくなるだろう。

女性達は天女の様であり、彼女等の美しさを語る言葉を知らない。男性達は心や体の敏捷さを表すかの様に晴れやかである。子供達は朗らかで、自由であり、天使を連想させる。どうやら我々はこれらの人々からやって来る優しさとかつろぎのフィーリングに巻き込まれたようである。

大気は全体にプリズムの様な光線がしみわたり、建物でさえそうした反射光を放っている。

1台の荘厳な乗り物がこちらに向かって来て、停止すると3人の男が外に出てきて我々に挨拶した。火星人のホストが彼等を我々にそれぞれ金星、土星そして木星の指導者であると紹介し、こう付け加えた。「これらの惑星では、火星がそうであるように州や国というような区切りはありません。それぞれの惑星には一人の選ばれた指導者がいて、人々の代議員から成る議会によって補佐されています。ここでもまた、指導者は自らの地位を名誉として、また創造主の意思に沿って、人々に奉仕することを自らの特権と見なしているのです」

この人達の心からの歓迎によって、我々は異星人ではなく互いにいつも知り合っているそれ以上の間柄であるように感じる事ができた。

招きに応じてその乗り物に乗り込むと、その内部は豪華で居心地のよいことに気付いた。それは火星での物とほぼ同様な機構で動くように見える。随員が後ろのコンパートメントを開けて我々に飲み物を出してくれた。ジョンストーン博士が「地球の健全さのために」を祈念した乾杯を提案した。もし地球人が我々が目撃したこのような素晴らしい事柄を体験することができるとすれば、それは非常に価値のあることであり、それは当を得た提案であった。

(つづく)